

茨城県教育財団文化財調査報告第195集

金田西・西坪B遺跡

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 VI

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第195集

こんだにし にしつぼ
金田西・西坪B遺跡

中根・金田台特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書VI

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

序

つくば市は、国際交流の拠点にふさわしい町づくりを進めております。この町づくりの一環として、つくば市と都市基盤整備公団茨城地域支社は、市と東京圏を直結する「つくばエクスプレス」の開発と同時に、沿線開発を一貫的に進める上地区画整理事業を計画的に推進しております。

財團法人茨城県教育財団は、都市基盤整備公団茨城地域支社から中根・金田台特定土地区画整理事業地内の聖蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、中谷津遺跡、中原遺跡及び上野陣場遺跡の発掘調査を実施してまいりました。その成果はすでに当財団の文化財調査報告第139・155・159・170集として報告し、さらに今年度も調査・整理を進めています。

本書は、金田西・西坪B遺跡の平成12年度における確認調査の成果を収録したものであります。本書が、研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

財團法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

例　　言

1 本書は、都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により財團法人茨城県教育財團が平成12年7月から平成13年1月まで確認調査を実施した、つくば市大字金田字吹上1481番地、同市大字金田字長者塚1540番地ほかに所在する金田西・西坪B遺跡の確認調査報告書である。

2 当遺跡の確認調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　　査　　第1期 平成12年7月1日～平成12年10月31日

　　　　　　第2期 平成13年1月4日～平成13年1月31日

整　　理　　平成13年4月1日～平成14年3月31日

3 当遺跡の確認調査は、調査第二課長鈴木美治の指揮のもと、調査第二課第1班長瓦吹堅、主任調査員村上和彦、同長谷川聰を中心に、主任調査員小竹茂美、副主任調査員宮田和男、同大塚雅昭、同荒井克一郎が調査した。

4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと、主任調査員川上直登、同長谷川聰、副主任調査員大塚雅昭が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。

川上　　例言 凡例 抄録

長谷川　　第3章　まとめ

大塚　　第1章 第2章

5 平成13年度茨城県遺跡地図の改定に伴い西坪B遺跡が金田西坪B遺跡と名称が変更されたが、本書においては旧遺跡名を使用する。

凡　　例

1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標を用いて区画し、X軸=+10760.000m、Y軸=+26840.000mの交点を（A 1 a 1）とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。小調査区も同様に北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…oと小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a 1 区」、「B 2 b 2 区」のように呼称した。

2 土層と遺物の観察における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

3 遺構、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺　　構　　住居跡-S I　溝-S D　道路跡-S F

土　　層　　擾乱-K

4 遺構及び遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 粘土

 版築

 繊維土器断面

抄 錄

ふりがな	こんだにし・にしつほびーいせき							
書名	金田西・西坪B遺跡							
副書名	中根・金田台特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次	VI							
シリーズ名	茨城県教育財团文化財調査報告							
シリーズ番号	第195集							
著者名	川上直登 長谷川聰 大塚雅昭							
編集機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2							
発行機関	財団法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2							
発行日	2002年(平成14年)3月25日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ド	北 緯	東 緯	標 高	調査期間	調査面積	調査原因
金田西遺跡	茨城県つくば市 大字金田字吹上 1481番地ほか	220522	36° 05'	140° 07'	25.9m ~	20000701 20010331	6,179m ²	中根・金田台特 定土地地区画整理 事業に伴う確認 調査
西坪B遺跡	茨城県つくば市 大字金田字良者 塚1540番地ほか	220110	36° 05'	140° 08'	25.8m ~	20000701 20010331	29,366m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
金田西遺跡	官衛	奈良・平安	溝 3条 礎石建物跡 1棟 竪穴住居跡 1軒 道路跡 1条	縄文土器片(加曾利E式), 上師器 (环), 須恵器(环, 壺)			河内郡御正倉院 を区画する溝と 礎石建物跡が確 認された。	
西坪B遺跡	集落	縄文時代	埋甕 1基	縄文土器片(加曾利E式)				
	官衛	奈良・平安	溝 5条 礎石建物跡 8棟 柱立柱建物跡 3棟 竪穴住居跡 11軒	縄文土器片(加曾利E式), 上師器 (环), 須恵器(环, 壺)				

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 トレンチの設定と概要	3
1 金山西遺跡	3
2 西坪B遺跡	4
第3節 遺構と遺物	5
1 遺構	5
(1) 渾	5
(2) 碇石建物跡	11
(3) 挖立柱建物跡	20
(4) その他の遺構	23
2 遺構外出土遺物	24
第4節 まとめ	28
写真図版	
付 図	



第1図 金田・西坪B遺跡周辺図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、国際交流の中心、科学技術をリードする研究開発の拠点として新しい町づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが、つくば市と東京圏を直結する「つくばエクスプレス」の建設とそれに伴う沿線開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局は茨城県教育委員会あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は平成7年5月15日から6月8日にかけて現地踏査を、平成12年3月6～9日、13日～15、17日に試掘・確認調査を実施し、事業地内において金田西・西坪B遺跡の所在を確認し、平成12年3月17日に都市基盤整備公団茨城地域支社及びつくば市教育委員会あてに、その旨を回答した。平成12年3月21日に都市基盤整備公団茨城地域支社は茨城県教育委員会と、事業地内に所在する金田西・西坪B遺跡の取り扱いについて協議した。その結果、3月21日、茨城県教育委員会は、都市基盤整備公団茨城地域支社あてに確認調査を実施する旨を回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財團を紹介した。そこで、都市基盤整備公団茨城地域支社は財団法人茨城県教育財團と金田西・西坪Bの確認調査に関する委託契約を結び、財団法人茨城県教育財團は、平成12年7月1日から確認調査を開始した。

第2節 調査経過

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
調査準備	[■]						[■]	
重機による掘削及び埋め戻し		[■]	[■]		[■]			[■]
遺構確認			[■]					[■]
写真・実測			[■]	[■]	[■]			[■]

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

つくば市域は、筑波山の南西麓を南下する桜川の低地と、市の西側を南下する小貝川の低地及びそれらに挟まれた標高25~27mのほぼ平坦な台地からなり、つくば市の東方約5kmには竜ヶ浦、北端には筑波山がそれぞれ位置している。この台地の両端を流れる桜川と小貝川によって大きく開析された流域には、標高約5mほどの沖積低地が形成され、台地との標高差は約20mである。また、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川など中小河川が南流して、台地縁部を浅く開析している。この台地は筑波・稻敷台地と呼ばれ、千葉県北部から茨城県南部に広がる常緑台地の一部であり、地質的には新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積する。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂疊層が土体をなし、その上に板橋層または常緑粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらにその上に関東ローム層が堆積し、最上部は鶴見土層となっている。関東ローム層は、新潟ロームに属し、武藏野ローム、立川ロームに比定され、怪石層の分布からみると、富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

金田西・西坪B遺跡は、つくば市桜井宿北部のつくば市大字金田字吹上1481番地、同市大字金田字長者塚1540番地ほかに所在し、桜川の低地を望む標高24~25mの右岸台地上に立地している。遺跡周辺の土地利用の状況は、台地上が主として畠地、桜川流域の低地は水田として利用されている。

第2節 歴史的環境

当遺跡が位置する台地上には、九重東岡廃寺跡、郡衙関連遺跡の中原遺跡が所在している。これらの遺跡はいずれも近接しており、当遺跡から九重東岡廃寺跡は北西500m、中原遺跡は西700mに位置している。九重東岡廃寺跡は古くから瓦片・土師器片・須恵器片が多量に出土することが知られており、1984年に桜村史編さん事業の一環として、桜村教育委員会から委託された筑波大学によって一部の調査がなされ、東岡遺跡として報告されている。この調査で検出された遺構は基壇建物の一部、瓦溜め土坑の一部、井戸跡などであり、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・道具瓦・土師器片・須恵器片が出土している。また、2000年12月から2001年1月には、県教育委員会の委託を受けて茨城県教育財團により確認調査が実施され、基壇建物跡1棟、掘立柱建物跡12棟、堅穴住居跡21軒、瓦溜め土坑1基、土器溜め土坑1基、溝4条、整地層1か所が検出され、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などの多くが瓦溜め土坑から出土した。また、中原遺跡は、8世紀前葉から10世紀前葉までの約200年間に跨られた集落跡であり、当遺跡は河内郡正倉が確立する8世紀前葉までに、補完的な郡の倉庫が置かれていたと考えられ、正倉の確立以降は、郡衙や郡寺と密接な関係を持ちながら、経済的にも力を増大し、10世紀前葉以降に衰退していく集落である。その他、桜川の上流左岸には、筑波郡衙及び郡寺の平沢官衙遺跡や筑波廃寺跡(中台廃寺跡)も所在している。また、周辺部には160軒以上の堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された古墳時代から平安時代にまたがる柴崎遺跡や、九重廃寺系軒平瓦と筑波廃寺系軒丸瓦が出土した下大島遺跡などが立地している。

東岡・金田の台地上は、正倉跡・郡寺跡・郡衙跡(未確定)、さらにこれらと関りの深い中原遺跡が隣接し、古代河内郡の政治・文化の中心であった様相を表出している。

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

当遺跡は、1959年に中学校校庭の拡張工事に伴い表土を除去した際、3間×4間の純柱掘立柱建物跡3棟が確認され、古代河内郡都の一部と考えられた。周辺部からは炭化米が多量に出土することから倉庫群の存在も想定され、古代河内郡の中枢部として注目された。また、台地下東側には条里制造構の本田遺跡が位置していたが、は場整備事業によって埋没している。

今回の確認調査の目的は、金田西遺跡及び西坪B遺跡の遺跡の性格と範囲の確認であり、調査対象面積は35,545m²である。確認調査は、基本的に日本平面直角座標第IX系座標のX軸及びY軸を基準としたトレンチによって実施し、部分的には拡張して遺構の規模を確認する調査法を採用した。

調査によって確認された遺構は、礎石建物跡9棟、掘立柱建物跡3棟、正倉域の区画溝5条のほか、竪穴住居跡12軒、溝2条、道路跡1条である。また、西坪B遺跡では縄文時代中期の集落跡と複合しており、調査区内から遺物収納箱(60×40×20cm)に30箱の縄文土器が出土している。

第2節 トレンチの設定と概要

1 金田西遺跡

金田西遺跡では、正倉域の北辺を区画する東西方向の溝が想定されるため、南北方向に幅2mのトレンチを東から1～6トレンチと設定した。以下トレンチごとに遺構の確認状況を記する。

1 トレンチ B 5 f 1 区から南へ約24m (B 5 j 1 区)。谷が入り込み、遺構は確認できなかった。

2 トレンチ B 4 g 6 区から南へ約28m (C 4 c 6 区)。北部は耕作による擾乱や、時期や性格の不明な上坑が確認されたが、正倉域に関わると思われる遺構は確認できなかった。

3 トレンチ B 3 h 0 区から南へ約38m (D 3 a 0 区)。C 3 d 0 区から区画溝である第1号溝及びそれを掘り込んでいる第7号溝が確認されている。第7号溝はコの字状を呈し、さらにその南には第6号溝が東西に検出され、当遺跡に隣接する中臣城郭に伴う施設の一部ではないかと考えられる。3トレンチを第1・7号溝にそって西に拡張し、C 3 d 8 区で第1号溝のコーナー部を確認した。

4 トレンチ B 3 d 5 区から南へ約51m (D 3 b 5 区)。南行する第1号溝の西部に溝と平行して調査区の北部へ延びるものと思われる幅1～2mの硬化面があり、第1号道路跡とした。また、第1号溝を横切るように第6号溝が確認され、その溝にそって東部へ拡張したところ、溝に掘り込まれているが時期不明の第2号竪穴住居跡が確認された。

5 トレンチ C 2 a 0 区から南へ約52m (D 2 d 0 区)。北部で確認された第1号竪穴住居跡は、竪の存在は確認できたが、確認面の出土遺物が細片のため時期等は特定できなかった。また、トレンチの中央部からは縄文時代と思われる上坑が多数確認されたが、耕作による擾乱も受けている。

6 トレンチ C 2 a 6 区から南へ約17m (C 2 f 6 区)。上坑と思われる黒褐色の覆土をもつ遺構が数基確認されたが、時期・性格等は不明である。

2 西坪B遺跡

西坪B遺跡では、西辺を区画する南北の溝が想定されたので、東西方向に幅2mのトレンチを設定し、北から1～8トレンチとした。また、区画溝確認のため9～14トレンチをさらに設定し、さらに、建物跡の確認のため15・16トレンチを設定した。

1トレンチ F 2a1区から東へ約60m (F 3a7区)。耕作により削平されており、表上も薄く遺構は確認されなかった。

2トレンチ F 2f2区から東へ約72m (F 3f1区)。西部は1トレンチと同様に遺構は確認されなかつたが、東部のF 3f7区で第1号溝を確認する。

3トレンチ F 2j1区から東へ約81m (F 4j1区)。西部から中央 (F 2j5区)にかけて、時期・性格不明の溝及び土坑が確認されている。東部は谷の黒色土中に当初住居跡と考えられた地点 (G 3a7区)から区画溝西辺の第1号溝が確認されている。

4トレンチ G 1f0区から東へ約95m (G 4f4区)。中央部は谷のため遺構の確認が困難であったが、西部には時期・性格不明の溝や土坑が確認されている。東部のG 3f7区で第1号溝をG 4f3区で第3号溝を確認する。

5トレンチ H 2a6区から東へ約80m (H 4a6区)。西部から中央にかけては遺構が少なく、東部のH 3a7区から第1号溝、また、H 4a4区から第3号溝が確認されている。

6トレンチ H 2e5区から東へ約75m (H 4e4区)。東部のH 3f7区から第1号溝が確認されているほか、H 3f0区から縄文時代中期の埋甕が検出された。縄文土器の出土も多く、周囲に同時期の集落跡の存在が予想できた。

7トレンチ I 3a6区から東へ約15m (I 3a8区)。第1号溝の確認のためトレンチの長さを限定して設定する。I 3a8区で第1号溝を確認するが、第3号溝は調査区域外へ伸びているものと思われ、確認できなかつた。

8トレンチ I 3f6区から東へ約37m (I 4e5区)。第1号溝はI 3f8区で東へ直角に屈曲し、正倉城の南区画部と思われる部分に伸びる第2号溝とに分かれる。第2号溝の確認のため、南にトレンチを拡張するとともに、南部に東西方向の第9～11トレンチを設定する。

9トレンチ J 3a7区から東へ約32m (J 4a5区)。西部J 3a9区で第2号溝を確認する。表土層中及び確認面から縄文土器片が多数出土し、隅丸方形の堅穴住居跡や円形の土坑などを確認する。

10トレンチ J 3c6区から東へ約44m (J 4c6区)。J 3f9区で第2号溝を確認する。第2号溝に沿って11トレンチまで南へ拡張する。この拡張区においても第2号溝を確認でき、周辺部から縄文土器片が多数出土している。

11トレンチ J 3i5区から東へ約40m (J 4i6区)。中央部J 3j0区で第2号溝を確認する。縄文土器片が多数出土している。

12トレンチ 第1期の調査はI 5b3区から南へ約24m (I 5h3区)で、I 5b3区で第2号掘立柱建物跡の東柱列を確認する。I 5e3区で第1号溝を確認した。そのためトレンチを東へ拡張して第1号溝と第2号掘立柱建物跡の範囲を確認する。その拡張区では第1号溝の幅が狭くなり、さらに第2号掘立柱建物跡は東へ伸びないことが確認された。第2期調査においては、G 5e3区から南へ約62m (I 5a3区)のトレンチを設定した。H 5a3区一帯において確認面上に炭化米粒が多量に出土している。

13トレンチ 第1期の調査はI 5a6区から南へ約49m (J 5c6区)の調査区で、I 5e6区では第1号溝の

幅が狭くなる。I 5 g 6 区から南は縄文土器片が多数出土し、重複の激しい土坑群も確認されている。さらに、第2号溝の確認のためK 5 a 6 区に調査区を設けたが、第2号溝は途切れでその付近に一部硬面面が確認された。第2期の調査では、G 5 e 6 区から南へ約43m (H 5 e 6 区) に調査区を設定し、南部からは縄文時代の堅穴住居跡と思われる円形の遺構が確認された。更に、第1期のトレンチ南部のK 5 f 6 区から南へ約18m (L 5 a 5 区) に調査区を設定し、その南端において第5号溝を確認した。

14トレンチ I 6 d 6 区から南へ約126m (L 6 e 6 区)。I 6 d 6 区で第1号溝を確認し、そこから南へ約24m のJ 6 a 6 区で第8号礎石建物跡を確認する。また、第2号溝がJ 6 a 8 区、J 6 g 6 区で確認され、南東コーナー部は弧を描くように曲がって北東方向に向かうことが確認された。さらに調査区の南端で堅穴住居跡4軒とK 6 g 6 区で第5号溝を確認した。

15トレンチ G 4 e 0 区から南へ約67m (I 5 b 1 区)。K 4 a 0 区から南へ約10m (K 4 d 0 区)。G 4 e 0 区において第1号礎石建物跡を確認し、更にII 5 d 1 区で第5号礎石建物跡、II 5 g 1 区で第6号礎石建物跡、II 5 i 1 区では第7号礎石建物跡を確認した。この調査区内では、耕作による擾乱中からは炭化米粒が出土している。

16トレンチ G 5 e 8 区から南へ約60m (H 5 j 8 区)。G 5 j 8 区で第2号礎石建物跡を、H 5 d 8 区で第3号礎石建物跡、H 5 h 8 区で第4号礎石建物跡を確認する。第3号礎石建物跡の北部に第4号溝が重複して確認された。

区画溝と考えられる第1～5号溝、第1号基壇建物跡については一部を掘り込み、断面及び底面の観察を行ったが、礎石建物跡のほか、その他の土坑や住居跡の遺構については確認面での観察のみであるため、都構正倉域の成立や廃絶時期、また、その他の遺構との関係などについては今後の本調査の成果を待たなければならぬ。

第3節 遺構と遺物

今回の確認調査では、トレンチ部分についてのみ表上を除去し遺構の確認調査を実施した。一部の溝、基壇建物については土層観察を実施したが、その他の遺構は確認面での観察であるため、時期・性格等は今後の発掘調査に委ねることとし、以下、確認された遺構の概略について記することとする。

1 遺構

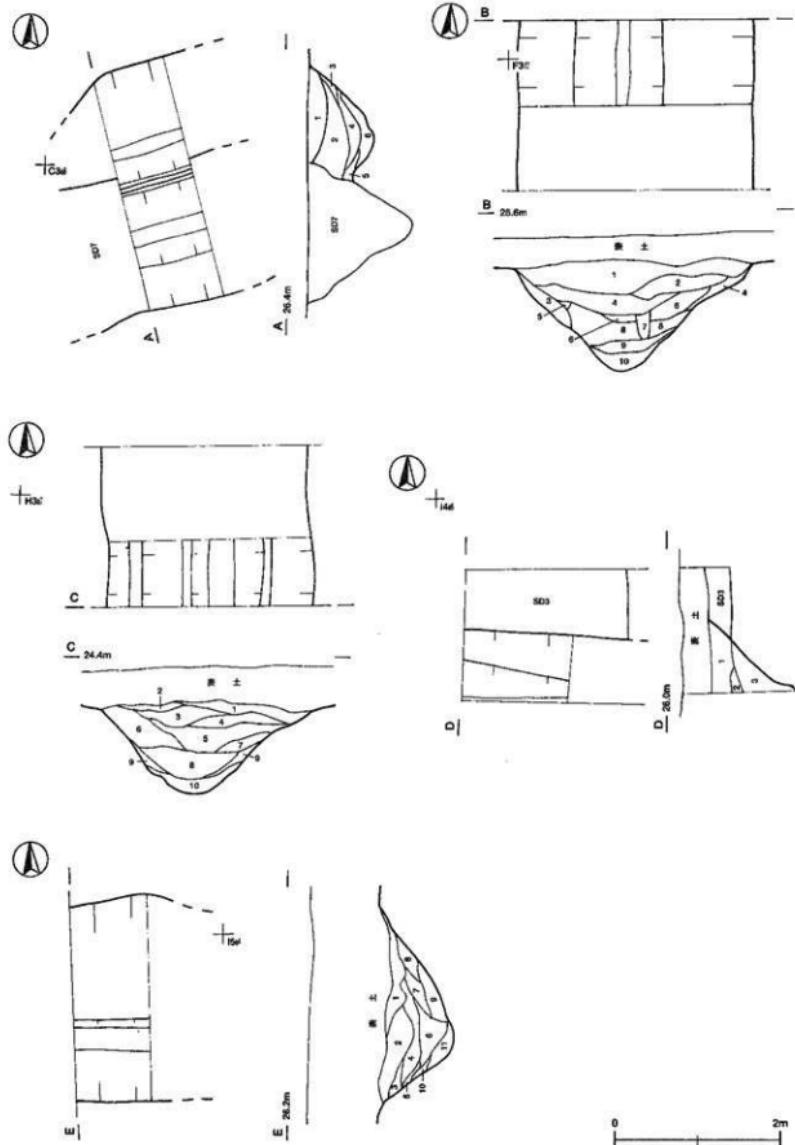
(1) 溝

第1号溝 (第2図)

位置 調査区中央の平坦部に位置し、金田西遺跡のC 4 d 1 区～D 3 a 6 区で北辺とコ・ナー部及び西辺、西坪B遺跡のF 3 f 7 区～I 3 f 8 区では西辺が、I 3 f 8 区～I 6 d 6 区では南辺がそれぞれ確認された。北辺から南16m、西辺から東19mに第9号礎石建物跡が、南辺から北55m、西辺から東48mに第1号礎石建物跡がそれぞれ存在する。

重複関係 金田西遺跡で北辺が第7号溝、西辺が第6号溝にそれぞれ掘り込まれている。西坪B遺跡の南西コーナー部では、第2号溝と重複しているが、未調査のため新旧関係は不明である。

規模と形状 上幅112～390cm、下幅20～42cmで、確認面からの深さは95～129cmである。断面形は堀研状で、底面がU字状を呈する部分が一部にある。確認できた長さは、北辺が14m、西辺が245m、南辺が112mの逆コ



第2圖 第1号溝実測図

の字状で、北辺と南辺の東部は調査区外に延びている。北西コーナー部は110°で屈曲している。南辺のコーナー部から東へ72mの地点では、長さ3mにわたって上幅が30~50cmと狭くなる。

方向 北辺はN-80°-W、西辺の北部はN-10°-Eであり、西岸B遺跡ではN-2°-Wで、コーナー部(I 3f8区)ではほぼ直角に屈曲し、南辺はN-86°-Eである。

土層解説 A

1 黒褐色	ロームブロック中量、焼土・炭化粒子微量	4 黑褐色	ロームブロック少量、焼土・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 黑褐色	ロームブロック中量
3 墓褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 墓褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

土層解説 B

1 砂褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 墓褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 墓褐色	ローム粒子中量、ロームブロック微量	7 墓褐色	ロームブロック微量
3 墓褐色	ローム粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	8 墓褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
4 黑褐色	ローム粒子中量、炭化物・焼土粒子少量、ロームブロック微量	9 墓褐色	ローム粒子少量、炭化物・粘土ブロック微量
5 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	10 雪瑞褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量

土層解説 C

1 黑褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	7 黑褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
2 黑褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	8 黑褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量
3 墓褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	9 黑褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量
4 黑褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・白色粒子微量	10 黑褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5 黑褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・白色粒子・		
6 黑褐色	粘土ブロック微量		
	ロームブロック少量、焼土ブロック・白色粒子微量		

土層解説 D

1 墓褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 墓褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 墓褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

土層解説 E

1 墓褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 黑褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
2 黑褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	8 黑褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 墓褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	9 墓褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 墓褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 墓褐色	ローム粒子中量
5 墓褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	11 黑褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
6 黑褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

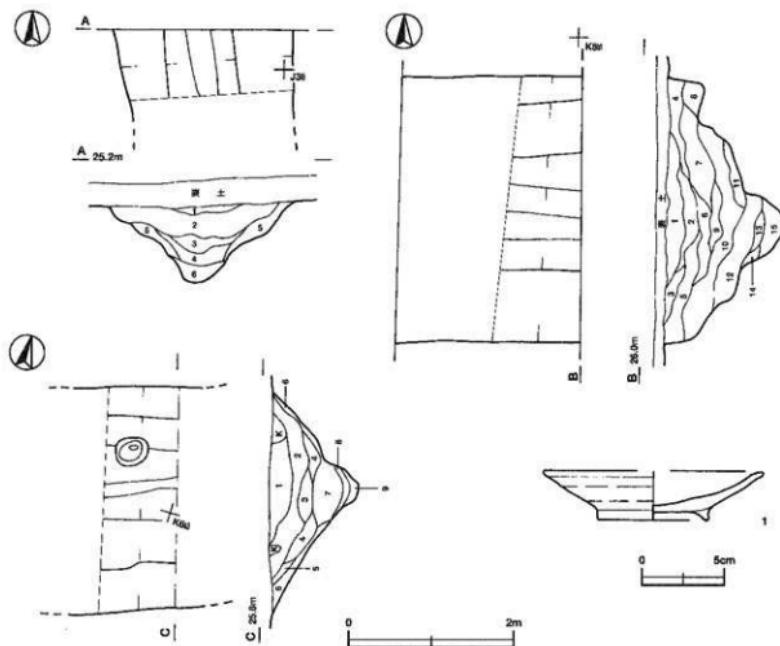
遺物出土状況 土層観察用のサブトレーンチから、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土している。いずれも細片で、埋没過程に混入した物と思われる。中でも南辺部の調査区においては縄文土器片の出土量が多い。

所見 本跡は、規模や形状から河内都衛正倉院を区画する溝であり、東西方向は地形から見て約150mは存在すると思われる。南辺の中央部にある幅の狭くなる部分は、推定される正倉城の中軸線上に位置し門跡と考えられ、その北部線上に建物跡がない。

第2号溝(第3図)

位置 調査区南部の平坦部、第1号溝が東へ屈曲するコーナー部のI 3f8区からJ 3j0区、K 4b0区、K 5b5区及びK 5a9区で南辺、J 6h5区、I 6j8区で東辺がそれぞれ確認された。東辺の西2mには第8号竪石建物跡が存在する。南部のK 5b6区の途切れる部分も門跡と考えられ、その北部線上には硬化した路面状の痕跡が点在する。

重複関係 第1号溝と分岐しているが新II関係は未調査である。



第3図 第2号溝・出土遺物実測図

規模と形状 上幅220~330cm、下幅20~30cmで、確認面からの深さは95~130cmである。断面形は薬研状で、底面がU字状を呈する部分がある。確認できた長さは、西辺が66m、南辺が約120mで、北東部は調査区外に延びるが、西辺と同様に、第1号溝の南辺部まで延びるものと思われる。南辺は西辺から東へ62mの地点で一度途切れ、K 5 b 9 区で再び確認されたが、途切れ部の長さは調査区外のため不明であり、門跡と考えられる。南東のコーナー部はK 5 b 0 区付近から弧を描くように曲がり、J 6 h 5 区に至る。

方向 西辺は I 3 f 8 区から南方向(N-5°-W)に延び、南辺は K 4 b 0 区から東方向(N-89°-E)で、K 5 b 0 区に至り、北東方向(N-30°-E)へ弧を描き J 6 h 5 区から北北東方向(N-20°-E)に延びて I 6 j 9 区に至る。

土層解説 A

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

- 5 噴褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 噴褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

土層解説 B

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量

- 5 噴褐色 ローム粒子・炭化物中量、焼土粒子微量
- 6 噴褐色 ローム粒子中量、炭化物少量、焼土ブロック微量

7 黒褐色	ローム粒子少量、炭化物微量	燒土ブロック微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量	
9 黒褐色	ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量	
10 黑褐色	ロームブロック・炭化物少量、燒土ブロック微量	
11 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	
12 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、燒土ブロック微量	
13 黒褐色	ロームブロック微量	
14 黒褐色	ローム小ブロック多量	
15 黒褐色	ローム小ブロック多量	

土層解説 C

1 灰褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 灰褐色	ローム粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量
5 浅褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
6 浅褐色	ローム粒子少量、ロームブロック微量
7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム粒子少量
9 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム大ブロック微量

遺物出土状況 土層観察用のサブトレーンチから、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土している。いずれも本跡の埋没過程に混入した物と思われる。第3図1は須恵器の高台付皿で、K460区(12トレーンチ)の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、第1号溝と同様に河内郡衛正倉院の区画溝と思われるが、正倉域の拡大や別院の存在も想定される別区画である。南辺の溝が途切れる部分は硬化面が点在し、そのほぼ真北68mに第1号溝の門跡部が位置することから、この部分も門跡と想定される。

第2号溝出土遺物観察表(第3図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高台付皿	113.5	3.0	6.7	長石・雲母	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り。 高台貼付け後、ナマ。	K5a1区 50%	

第3号溝(第4図)

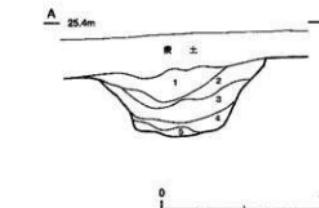
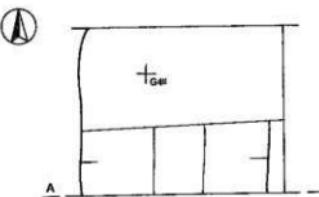
位置 調査区南部の平坦部、G4f4区からI4e6区で確認され、西28mに南北方向の第1号溝が平行し、東19mには第1号竪石建物跡が位置する。

重複関係 南端のI4e6区で第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上部は耕作のため削平されているが、確認できたのは上幅200~230cm、下幅60cm前後であり、確認面からの深さは90cmである。断面形は薬研状であり、確認できた3か所を結ぶ直線と思われ、長さ78mが確認されている。

方向 I4e6区からほぼ北方向(N=6°W)に延び、G4f5区に至る。

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量



第4図 第3号溝実測図

遺物出土状況 土層観察用のサブトレンチから、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土している。いずれも本跡の埋没過程に混入した物と思われる。

所見 本跡は、第1号溝によって区画された正倉院の内部施設を区画するものとも考えられるが、第1号溝との重複関係があることで第1号溝の区画より古い時期の区画溝の可能性も想定される。

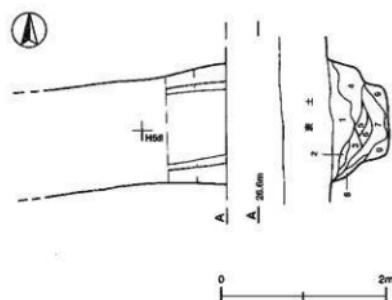
第4号溝（第5図）

位置 調査区南部の平坦部、II 5d7区からII 5d9区で確認され、南辺で第3号礎石建物跡と接し、南44mに第1号溝の南辺が位置する。

重複関係 本跡の南辺を第3号礎石建物跡が掘り込んでいる。

規模と形状 確認できたのは上幅130cm、下幅80cm、長さ6.5mの直線であり、II 5d7区で途切れる。確認面からの深さは90cm、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

方向 確認された西端（H 5d7区）からN-95°-Eで東方向に延びる。



第5図 第4号溝実測図

土層解説 A

- 黒褐色 ローム粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子少額、焼土粒子・熱土ブロック微量
- 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 黒褐色 ロームブロック・黑色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック少額、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子少額、焼土粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ロームブロック少額、焼土粒子・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック中量

所見 本跡は第3号礎石建物跡やそれと軸線を同じくする建物群と時間差が認められ、正倉院内部の施設を区画する溝の一部と想定される。

第5号溝（第6図）

位置 調査区南端の平坦部、K 5j5区、K 5j8区、K 6g6区で東西方向に確認され、北33mには第2号溝が位置する。

重複関係 K 5j5区で堅穴住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅240~250cm、下幅15~80cmが確認でき、深さは90~110cmである。断面形は薬研状である。

K 5j5区で検出された南壁は外傾して立ち上がる。確認した3か所を結ぶと長さ47mの直線となる。

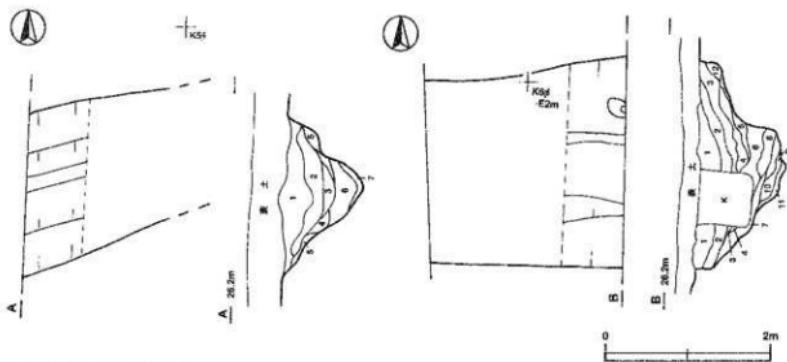
方向 確認できた西端（K 5j5区）からN-74°-Eの東北東に延びている。

土層解説 A

- 黒褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・白色粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック微量
- 黒褐色 ロームブロック少額

土層解説 B

- 強暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 灰暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 強暗褐色 ローム粒子・炭化物微量



第6図 第5号溝実測図

- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 断続色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック少量

- 9 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 10 深褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 11 黑褐色 ロームブロック少量
- 12 灰褐色 ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量

所見 本跡の性格は不明であるが、正倉院に関連する施設を区画する溝の一部と考えられる。

(2) 磯石建物跡

第1号磯石建物跡（第7・8図）

位置 調査区のはば中央部。G 4c9～H 5a2 区の台地の平坦部に位置する。南10mには第5号磯石建物跡が存在する。

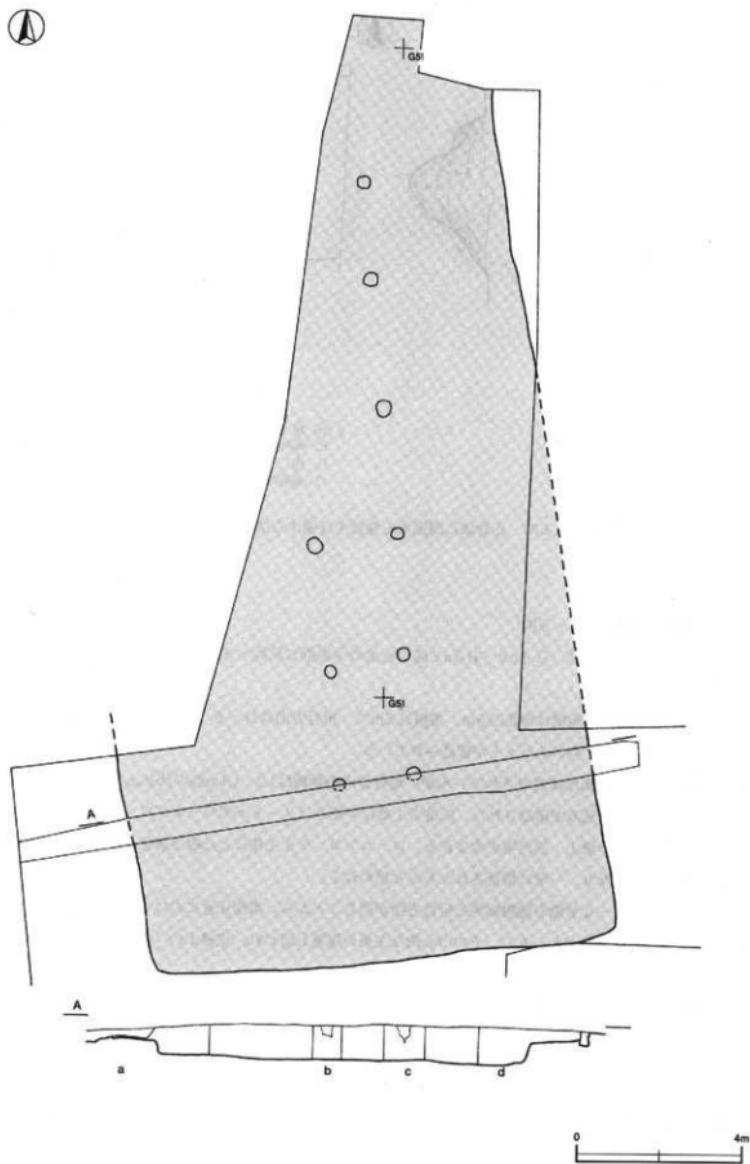
規模 確認できた基壇の規模は南北23.5m、東西11.2mで、桁行方向はN-6°-Wの長方形である。地盤面中央には南北方向に並ぶ2列の小ピットが確認されている。

掘込地業 上部の基礎築土は削平されているが、梁行方向の両側は1.2～1.4m幅の約40cmの掘り込みと、中央部分の80～90cmの掘り込みが確認された。版築の1単位の厚さは2～8cmでロームブロック・黒色土ブロックを用い、その他砂利や焼土・炭化物が含まれる。ロームブロックを主体にした層と黒色土ブロックを主体にした層がはば交互に重なり、一度に構築されたものと思われる。

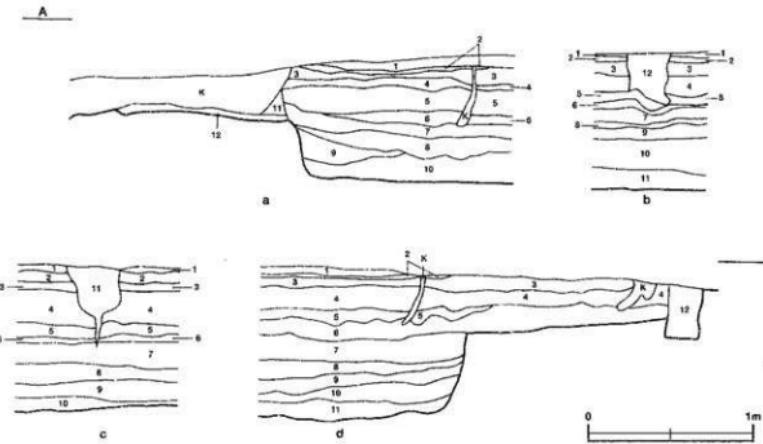
所見 本跡は、第2～4号磯石建物跡等と桁行方向が同じことから、郡衙正倉における建物群を構成する倉庫で、規模や版築の構築状況からみて、その中心的な主要な建物と思われ、史料上の「長倉」・「法倉」に相当する特殊な建物と想定される。

版築土層解説 a

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土・炭化物微量、砂利微量、しより強
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土・炭化物微量、しより強
- 3 黑褐色 ロームブロック中量、焼土・炭化物微量、粘性・しより強
- 4 黑褐色 ロームブロック中量、黑色土ブロック少量、焼土・炭化物微量、しより強
- 5 黑褐色 ロームブロック中量、黑色土ブロック・焼土・炭化物微量
- 6 黑褐色 黑色土ブロック・ロームブロック少量、焼土・炭化物微量
- 7 黑褐色 ロームブロック・黑色土ブロック少量、焼土・炭化物微量、しより強
- 8 断続色 ロームブロック・黑色土ブロック少量、焼土・炭化物微量
- 9 黑褐色 黑色土ブロック・ロームブロック中量、燒土・炭化物微量、しより強
- 10 黑褐色 ロームブロック・黑色土ブロック中量、砂利少量、焼土・炭化物微量、しより強



第7図 第1号礎石建物跡確認状況図(1)



第8図 第1号基礎建物跡確認状況図(2)

11 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量
12 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土微量、しまり強

版築土層解説 b

- 1 灰褐色 ロームブロック少量、焼土・炭化物、砂粒微量、しまり強
- 2 黒褐色 砂粒多量、燒土・小礫少量、しまり強
- 3 黑褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土・炭化物、白色粒子、砂粒・小礫微量、しまり強
- 4 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量、しまり強
- 5 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物、白色粒子、砂粒微量、しまり強
- 6 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量、しまり強
- 7 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量、しまり強
- 8 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量
- 9 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土・炭化物微量
- 10 灰褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土・炭化物微量、しまり強
- 11 灰褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、燒土・炭化物、白色粒子、砂粒微量、しまり強
- 12 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック・山積粒子少量、焼土・炭化物、砂粒微量(ビット)

版築土層解説 c

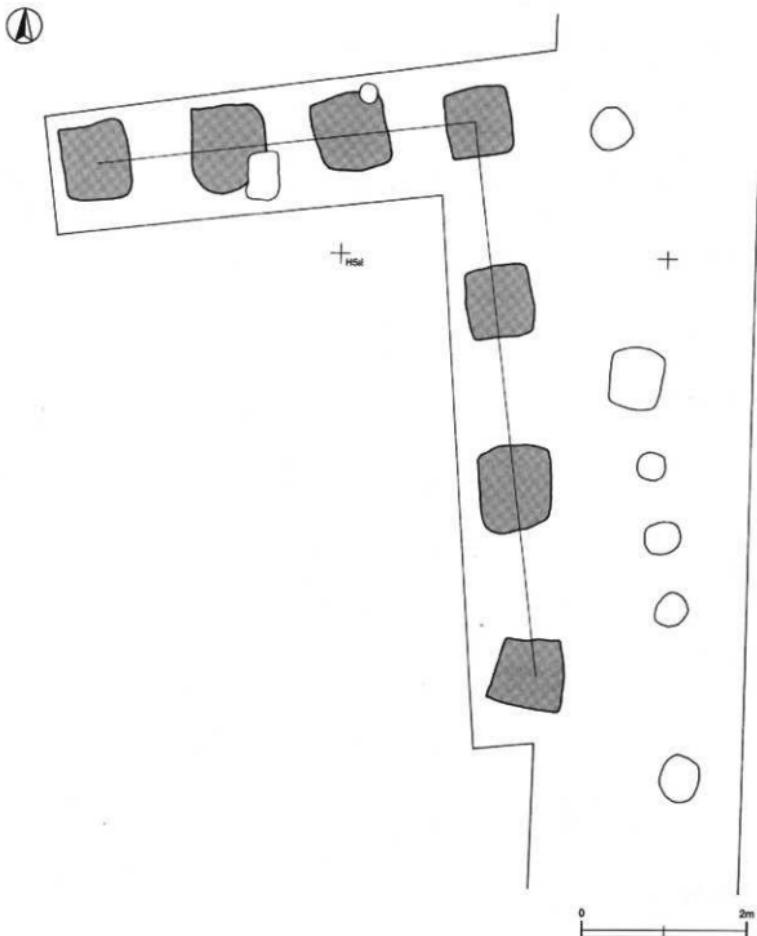
- 1 黑褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量、しまり強
- 2 黑褐色 黒色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物、白色粒子・山砂・小礫微量、しまり強
- 3 黑褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化物、白色粒子・砂粒微量、しまり強
- 4 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物、白色粒子微量、しまり強
- 5 灰褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物、白色粒子微量
- 6 黑褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黑褐色 ロームブロック少量、黒色土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 8 黑褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量
- 9 黑褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量
- 10 灰褐色 ロームブロック・砂粒・燒土ブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・小礫微量
- 11 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック・焼土粒子・炭化物、白色粒子・砂粒少量、燒土粒子・炭化物・小礫微量(ビット)

版築土層解説 d

- 1 灰褐色 ロームブロック・黒色土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量、しまり強
- 2 黑褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子・山砂・小礫微量、しまり強
- 3 黑褐色 黒色土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物、白色粒子・小礫微量、しまり強
- 4 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物、白色粒子微量、しまり強
- 5 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化物、白色粒子微量、しまり強

- 6 黒褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、しまり強
 7 暗褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
 8 黒褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、しまり強
 9 黑褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
 10 黑褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物・白色粒子微量
 11 暗褐色 ロームブロック中量、黒色土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒・礫微量
 12 黑褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、黒色土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量、しまり強(ビット)

第2号礎石建物跡（第9図）



第9図 第2号礎石建物跡確認状況図

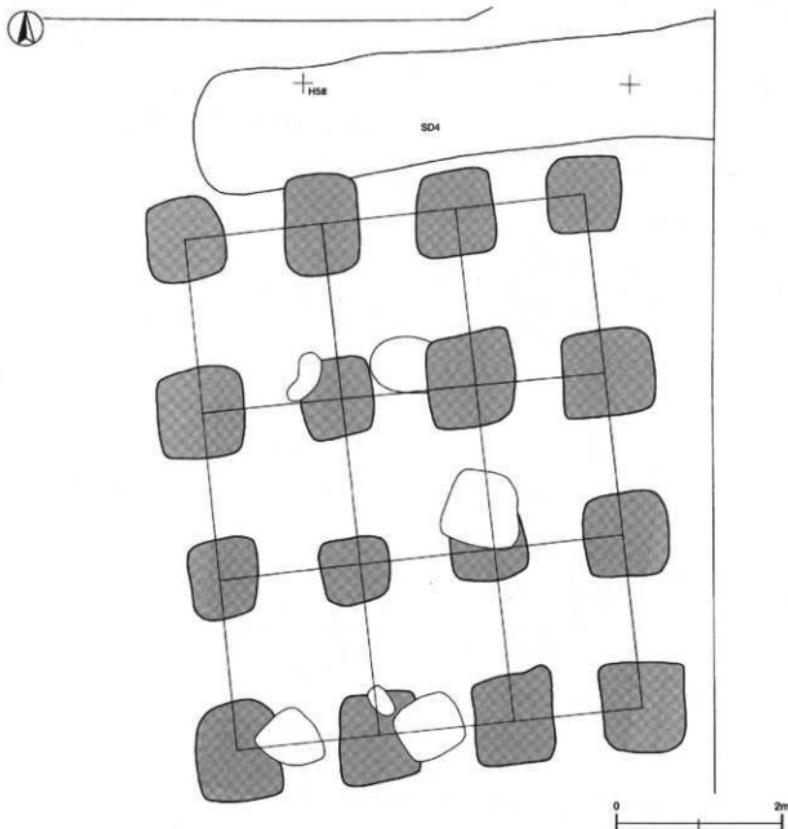
位置 調査区のはば中央部、G 5j 7～H 5c 8区の台地の平坦部に位置する。南7.5mに第3号礎石建物跡、同21mには第4号礎石建物跡が桁行方向をほぼ同じくして並んで存在し、西19mには第1号礎石建物跡が位置する。

規模 南西部が検出されていないが、桁行3間、梁行3間の総柱構造で、桁行方向はN-7°-Wの南北棟である。確認された規模は桁行長5.9m、梁行長4.5mを測り、柱間は桁行2.4～2.3m、梁行1.5～1.6mである。

掘込地業 長径88～106cm、短径80～88cmの長方形の掘り方に、白色粘土を詰め込んで構築した坪地業である。

所見 本跡は、第3・4号礎石建物跡と同一の桁行方向を示し、側柱列も一直線上に並ぶことから、郡衙正倉の建物群を構成する一般的な倉庫であると想定される。

第3号礎石建物跡（第10図）



第10図 第3号礎石建物跡確認状況図

位置 調査区のほぼ中央部、H 5d7～H 5f9 区の台地の平坦部に位置する。北7.5mに第2号礎石建物跡、南7.3mには第4号礎石建物跡が桁行方向をほぼ同じくして位置する。

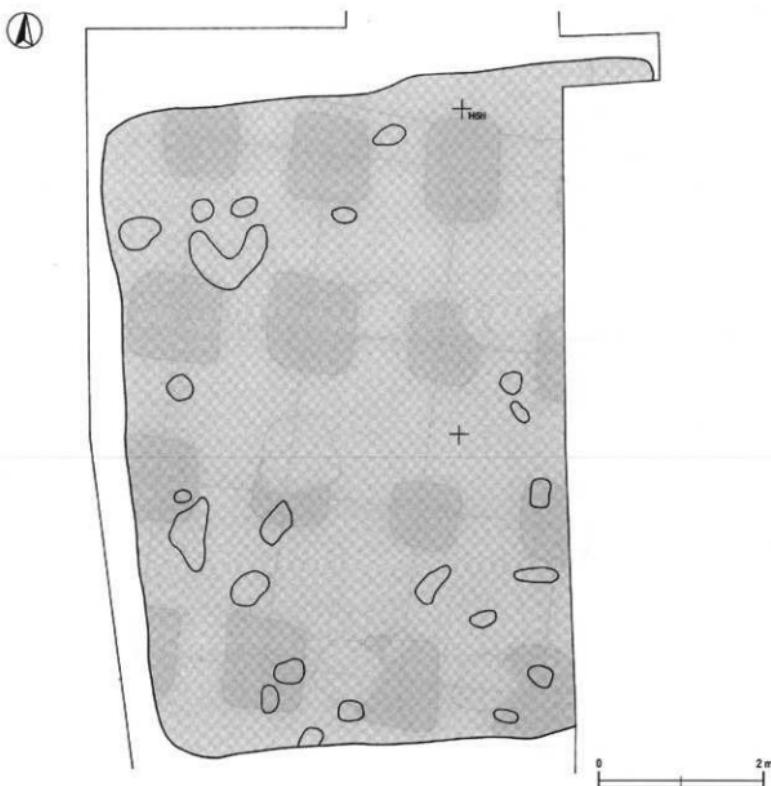
規模 桁行3間、梁行3間の総柱構造で、桁行方向はN-8°-Wの南北棟である。確認された規模は桁行長4.9m、梁行長6.5mを測り、柱間は桁行1.9～2.3m、梁行1.6～1.7mである。

掘込地業 長径84～124cm、短径80～82cmの長方形の掘り方に、白色粘土を詰め込んで構築した坪地業である。

所見 本跡は、第2・4号礎石建物跡と同一の桁行方向を示し、側柱列も一直線上に並ぶことから、郡衙正倉の建物群を構成する一般的な倉庫であると想定される。

第4号礎石建物跡（第11図）

位置 調査区のほぼ中央部、H 5h7～H 5i9 区の台地の平坦部に位置する。北8mには第3号礎石建物跡、南20mには区画溝の南辺である第1号溝が存在する。



第11図 第4号礎石建物跡確認状況図

規模 確認できた基壇の規模は南北7.9m、東西6.9mで、桁行方向はN-7°-Wの長方形である。

掘込地業 確認された地業面には小ピットがあるが、性格については現在のところ不明である。後世の耕作などにより基壇の上部は削平されているが、掘込地業による版築構造である。

所見 本跡は、第2・3号礎石建物跡と同一の桁行方向を示し、側柱列も一直線上に並ぶことから、郡衙正倉の建物群を構成する一般的な倉庫で、校倉に相当するものと想定される。

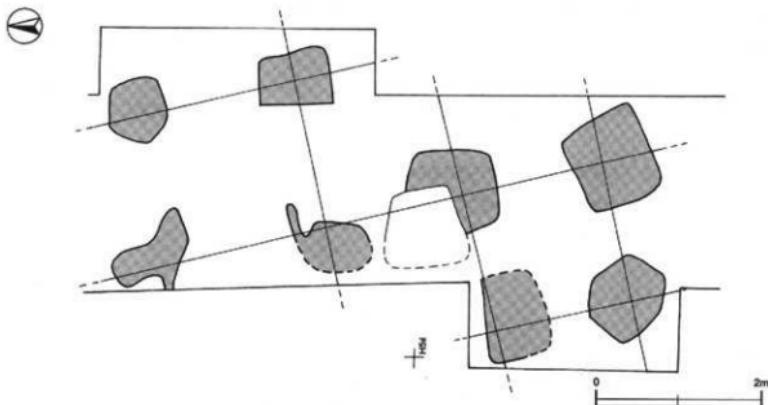
第5号礎石建物跡（第12図）

位置 調査区のはば中央部、H 5d1～H 5e1区の台地の平坦部に位置する。北10mに第1号礎石建物跡が、南4.8mには第6号礎石建物跡がそれぞれ位置する。

規模 桁行5.6m、東西は未確認であるが梁行は3.3mを確認し、桁行3間、梁行2間を確認したが、3間×3間の総柱構造で、桁行方向をN-7°-Wとする南北棟である。柱間は桁行約1.9m、梁行1.7～1.8mである。

掘込地業 長径79～110cm、短径70～95cmの長方形の掘り方に、白色粘土を詰め込んで構築した坪地業である。

所見 本跡は、第1号礎石建物跡との位置関係や桁行方向などから郡衙正倉の建物群の一部と考えられる。耕作による擾乱や調査区の制限から不明な点が多いが、第2・3号礎石建物跡と同様の坪地業による礎石建物であり、一般的な倉庫と考えられる。



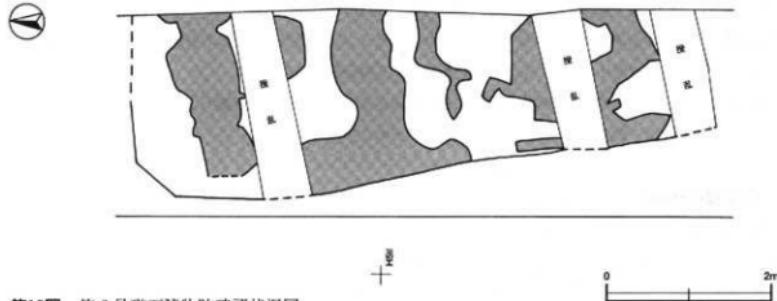
第12図 第5号礎石建物跡確認状況図

第6号礎石建物跡（第13図）

位置 調査区のはば中央部、H 5g1～H 5i1区の台地の平坦部に位置する。北6mに第5号礎石建物跡、南3mには第7号礎石建物跡が存在する。

規模 全体を検出していないが、南北7m、東西2.3m以上で、桁行方向はN-7°-Wの地業面を確認した。

掘込地業 掘込地業による構造であるが、耕作による擾乱が激しい。



第13図 第6号礎石建物跡確認状況図

所見 本跡は、第1・5号礎石建物跡と並ぶ正方形の平面形の倉庫と考えられる。確認面は擾乱が激しくまとまって検出された白色粘土は、版築の一部と考えられる。

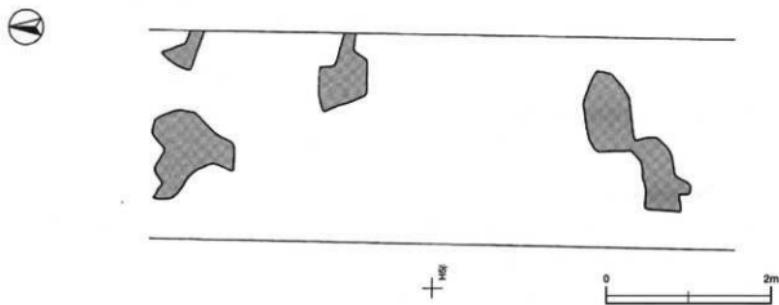
第7号礎石建物跡（第14図）

位置 調査区のほぼ中央部、H 5i1～H 5j1区の台地の平坦部に位置する。

規模 15トレンチ内に、耕作による擾乱が激しくうけているが、白色粘土による坪地業と、粘土が散乱している範囲を6.6mにわたり確認した。

掘込地業 長径88～106cm、短径80～88cmの長方形の掘り方に、白色粘土を詰め込んで構築した、坪地業である。

所見 本跡は、第5・6号礎石建物跡との位置関係等から郡衙正倉の建物群の一部と考えられる。全体の様相は不明ながら第2・3号礎石建物跡と同様の坪地業による礎石建物であり、一般的な倉庫と考えられる。



第14図 第7号礎石建物跡確認状況図

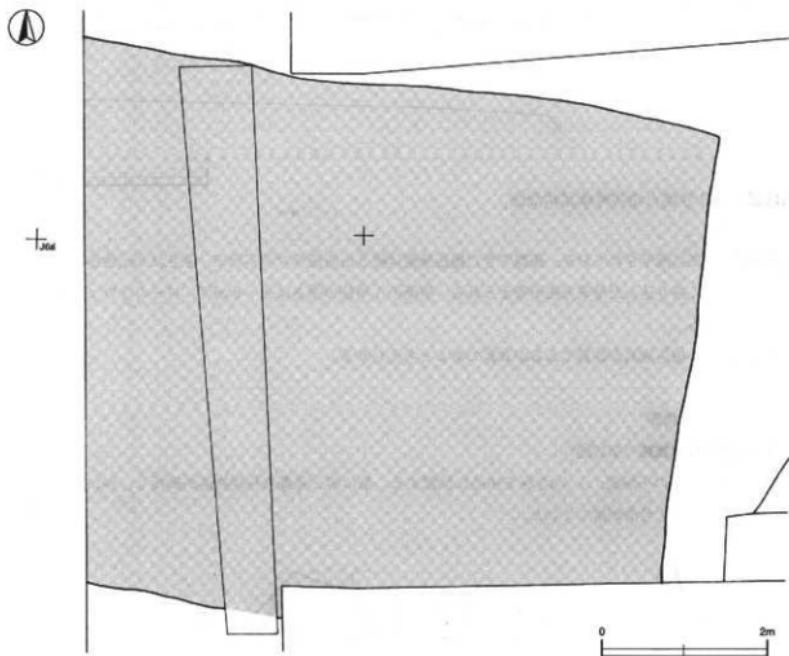
第8号礎石建物跡（第15図）

位置 調査区の南東部、I 6 j 6～J 6 b 7区の台地の平坦部に位置する。第2号溝の東辺に隣接し、北21mに第1号溝が存在する。

規模 確認できた規模は南北6.5m、東西7.7m以上で、桁行方向をN-81°-Wとする掘込地業による建物跡である。平面形は西部が検出されていないが、長方形と考えられる。

掘込地業 上部は削平されており、掘方地業の深さは耕作による擾乱部分で観察したところ、確認面から20cm前後である。

所見 本跡は、掘込地業がやや浅いが倉庫と考えられる。

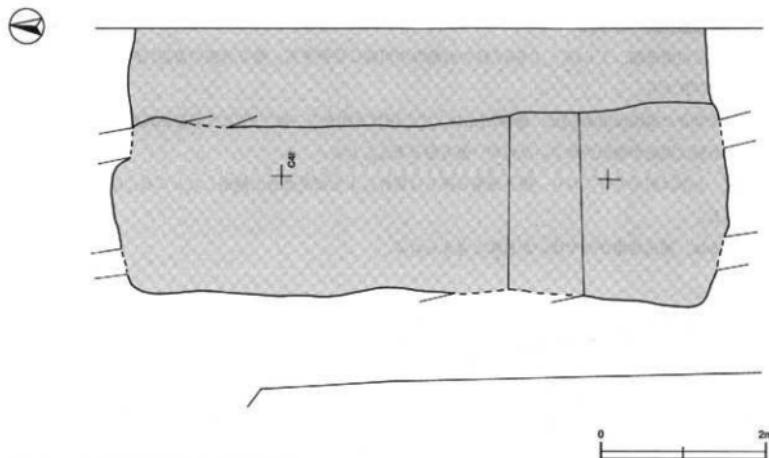


第15図 第8号礎石建物跡確認状況図

第9号礎石建物跡（第16図）

位置 調査区北部（金田西遺跡）のC 3 h 0～C 4 j 1区の台地の平坦部に位置する。北15mには第1号溝の北辺が位置する。

規模 確認できた基壇の規模は南北7.5m、東西3.3m以上で、桁行方向はN-0°-Wの掘込地業による建物跡である。平面形は東部が検出されていないが、長方形と考えられる。



第16図 第9号礎石建物跡確認状況図

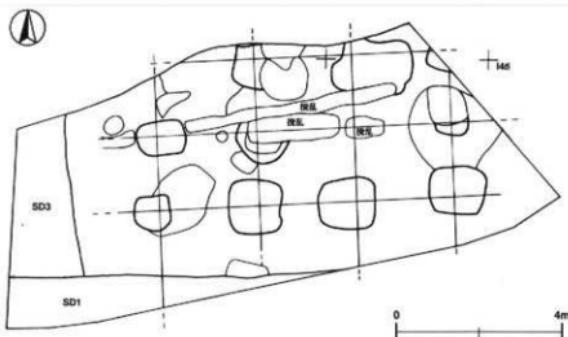
掘込地業 上部は削平されており、確認できた掘込地業は幅2m前後のコの字状で、深さは20cm前後であり、側柱部分を深く掘り込んだ地業方法が考えられる。版築の1単位の厚さは2~6cmで、ロームブロックを用いて構築している。

所見 本跡は、掘込地業が特異であるが倉庫であると考えられる。

(3) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第17図）

位置 調査区南部の平坦部、I-4 d 7区を中心に位置する。東に第2号掘立柱建物跡が隣接し、西に第3号溝が、南1mには第1号溝が接している。



第17図 第1号掘立柱建物跡確認状況図

重複関係 複数の土坑と重複しているが、未調査のため新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間以上、梁行2間以上の純柱建物跡で、桁行方向はN-86°-Wの東西棟である。確認された規模は桁行長7.5m、梁行長3.6mを測り、柱間は桁行2.4m前後、梁行1.8m前後である。南部は第1号溝に接近し、他の三方は調査区外のため全体の様相は不明である。

所見 本跡は、第1号溝に近接して位置し、第1号礎石建物跡を中心とする掘込地業の見られる倉庫群よりは古い時期の倉庫と考えられる。

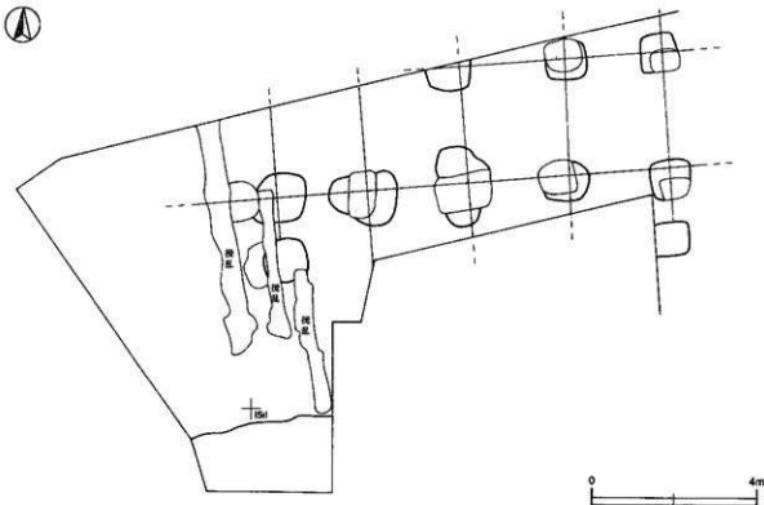
第2号掘立柱建物跡（第18図）

位置 調査区南部の平坦部、I 5c1区を中心に位置する。西に前述した第1号掘立柱建物跡が、北には第7号礎石建物跡が、南4mには第1号溝の南辺が位置している。

重複関係 西部は複数の土坑と重複し、その一部は掘立柱建物跡の掘り方になる可能性もあるが、確認面での調査のため詳細は不明である。

規模 桁行4間以上、梁行2間以上の純柱建物跡と想定され、桁行方向N-86°-Wの東西棟であり、第1号掘立柱建物跡とは同じ軸線をもつ。確認された規模は、桁行9.6m、梁行3.1mを測り、柱間は桁行2.4m前後、梁行3.0m前後である。東の梁行柱列と南桁行柱列の一部は確認できたが、北部は調査区外のため不明である。東梁行柱列の南1.5mに柱筋の通る柱穴と思われる掘り方が確認され、本跡に付随するものとも考えられたが、その南にも掘り方があり、別の建物になる可能性がある。

所見 本跡は、第1号掘立柱建物跡と同様に第1号溝に近接して位置しているため、第1号礎石建物跡を中心とする掘込地業の見られる倉庫群よりは古い時期の倉庫と考えられる。



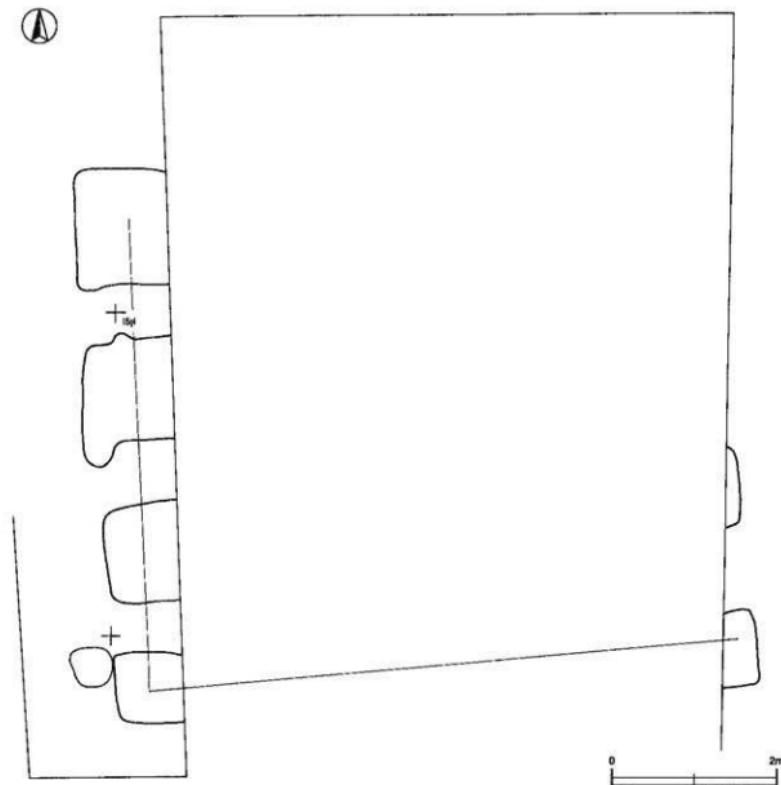
第18図 第2号掘立柱建物跡確認状況図

第3号掘立柱建物跡（第19図）

位置 調査区南部の平担部、I 5f4 区に位置する。北4.5mに第1号溝の南辺が位置し、北東部は門跡部となる。第1号溝を挟んだ北8mには第2号掘立柱建物跡の東妻柱列が柱筋を通して位置する。

規模 梁行3間であるが、桁行はトレンチ間の調査区外のため不明である。桁行方向N~86°-Eの東西棟で、確認できたのは桁行7.0m、梁行5.7mで、梁行の柱間は2.1m前後である。東西の梁行柱列のみを確認したが、能柱建物跡の可能性を考えられる。

所見 本跡は、第1号溝の区画の外にあり、第1号礎石建物跡を中心とする倉庫群や第1・2号掘立柱建物跡とは性格を異にする建物と考えられるが、明確ではない。



第19図 第3号掘立柱建物跡確認状況図

(4) その他の遺構

第1号埋甕 (第20・21図)

位置 調査区中央部の平坦部、6トレンチの東部H3e0区に位置する。

規模と形状 径約60cm、深さ約55cmの円形で、掘り込みの中に深鉢がやや斜位に埋め込まれている。

覆土 1層からなり、埋土と考えられる。

土層解説

1 埋 土 ロームブロック中量、堆土・炭化物微量

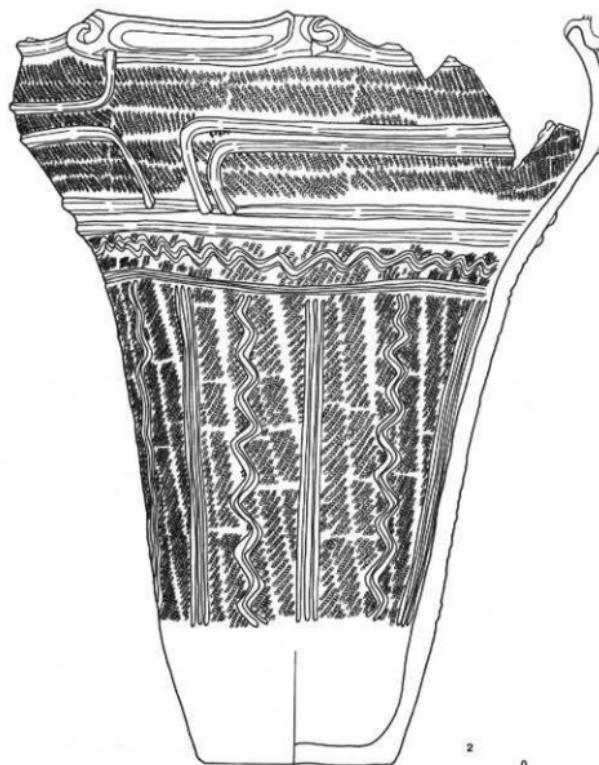
遺物出土状況 深鉢は、円形の掘り込みの中央部に斜位で埋納されている。

所見 本跡は出土遺物から縄文時代中期（加曾利E

I式）の埋甕である。



第20図 第1号埋甕実測図



第21図 第1号埋甕出土上遺物実測図

第1号埋甕出土遺物観察表(第21回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
2	褐文土器	深鉢	36.6	(46.4)	12.0	口縁部文様帶はR.L.の地文に陸帯が施され、胴部はR.L.の地文に美・雲母	長石・石英・雲母	普通	にぶい緑	H 3e0区	70%

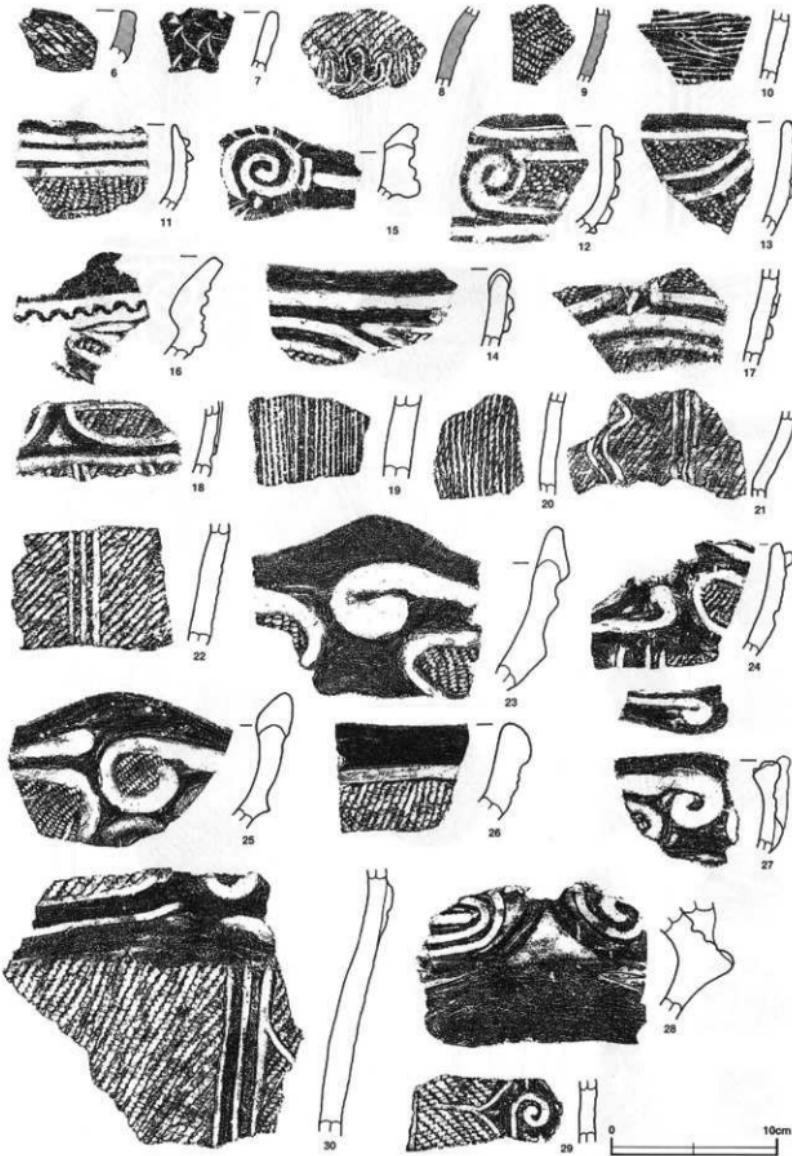
2 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表(第22~24回)

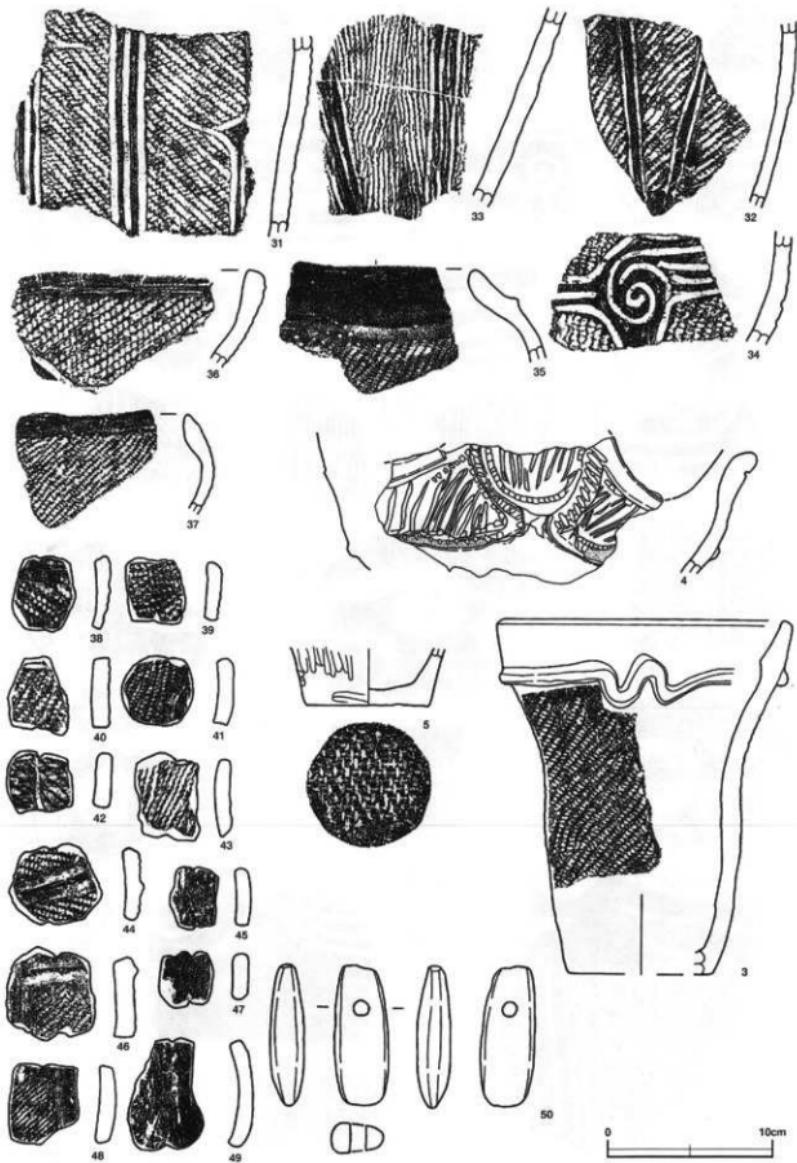
番号	種別	器種	LJ径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
3	繩文土器	深鉢	[17.0]	21.9	[8.9]	口辺部下端に蛇行する陸帯が施され、胴部はR.L.の單節繩文が施文されている。	長石・石英・雲母	普通	明赤褐色	I 5e4区	40%
4	西文土器	深鉢	[27.0]	(8.5)	-	口縁部文様帶は断片のある陸帯によって内側に沈線文が施文され、区画内には沈線と押し引き文が施文されている。	長石・石英・雲母	普通	褐	K 5a0区	10%
5	褐文土器	深鉢	-	(3.5)	7.5	胴部はヘラ磨き。底部に網代痕。	長石・石英・雲母	普通	にぶい緑	H 5a6区	5%

番号	時期	器形および文様の特徴	出土位置	備考
6~10	繩文時代 前中期	6, 8には無地繩文しが施され、8にはやや変形したコハツ文が施されている。9, 10は頭部下で9には羽状繩文、10は平継竹管による横窓の沈線文が施文されている。7の口辺部には波状底紋文が施文されている。	6-II 5e6区, 7-I 6e6区, 8-J 6f3区, 9-H 5e6区, 10-G 4f2区	
11~22	繩文時代 中期	11~16は口縁部片で、11~14は陸帯による区画内に[1], 13, 14はR.L.の單節繩文、12はR.L.の單節繩文と陸帯による施文様が施文されている。16には横位の沈線文による横窓が施文されている。17, 18の口辺部文様帶は陸帯によってくぬがされ、R.L.が施文されている。19~22はR.L.の單節繩文の地文に平行沈線及び蛇行沈線が施文されている。9は平継竹管による横窓の沈線。10には横窓文が施文されている。	11-15-J 4f1区, 12-J 4f3区, 13-13h区, 14-II 5e6区, 15-15e区, 16-J 3f8区, 17-18-J 3f9区, 19-22-H 5g8区, 20-J 5a6区, 21-J 3f9区	
23~34	繩文時代 中期	24~27は口縁部片で、24~25は波状1段目の頭部部に横窓文が施され、格円区画内に23はR.L.、25, 26, 27はR.L.が施文されている。26は口辺部に横窓の沈線文が施文される。頭部にR.L.の單節繩文が施文されている。27の口辺部には沈線文による横窓が施文されている。28の口辺部には沈線文が施文され、頭部は無文である。29~34は制部片で、單節繩文の地文に沈線文が施文され、頭部は無文である。34は高巻文が施文されている。	23-26-27-J 4f1区, 29-31-24-G 5区, 25-C 3区, 26-14-II 5e6区, 27-14-II 5e6区, 28-14-II 5e6区, 29-31-24-H 5a1区, 32-H 5b1区, 33-15-h6区, 34-H 5f8区	同一期
35~37	繩文時代 中期	口縁部片で、35の口辺部には微溝基部が並り、頭部にR.L.の單節繩文が施文されている。36にはR.L.の單節繩文の地文に沈線文が施文され、37の頭部にはR.L.の單節繩文が施文されている。	35-D 3b1区, 36-II 5b8区, 37-H 5d6区	

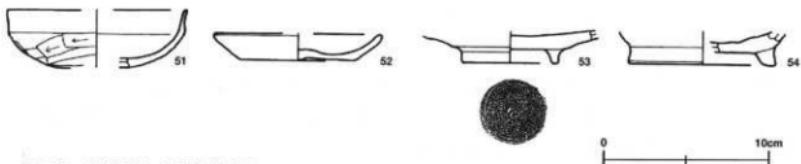
番号	器種	計測値			材質	特徴	出土位置	備考
		長5cm	幅4cm	厚2mm				
38	土器片錐	4.6	3.9	0.9	19.6	上器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.が施されている胴部片。	C 3j1区	
39	土器片錐	4.0	3.8	1.0	18.6	土器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.が施されている胴部片。	J 4a4区	
40	土器片錐	4.8	3.7	1.1	24.3	上器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.が施されている胴部片。	K 5c1区	
41	土器片錐	4.3	4.3	1.1	25.3	土器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.に沈線が施されている胴部片。	I 5a6区	
42	土器片錐	3.8	4.1	1.2	21.0	土器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.に施文され、輻方向に溝。	H 5e6区	
43	土器片錐	5.3	4.2	0.9	23.5	土器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.が施されている胴部片。	H 5d8区	
44	土器片錐	5.1	5.7	1.4	38.0	上器片 切り込み2か所。繩文R.L.に陸帯が施文されている胴部片。	I 5j6区	
45	土器片錐	3.9	2.9	1.0	12.6	土器片 切り込み2か所。無文の口縁部片。	K 6a1区	
46	土器片錐	5.8	5.4	1.5	50.2	上器片 切り込み2か所。單節繩文R.L.に陸帯が施文されている胴部片。	H 5d8区	
47	土器片錐	3.5	3.3	1.0	15.3	土器片 切り込み2か所。無文の口縁部片。	I 6e6区	
48	土器片錐	5.0	4.3	1.0	25.2	土器片 切り込み2か所。無節繩文に沈線が施文されている胴部片。	H 5d8区	
49	土器片錐	6.8	4.6	1.0	32.5	土器片 切り込み2か所。無文の口縁部片。	J 5b6区	



第22図 遺構外出土遺物実測図(1)



第23図 遺構外出土遺物実測図(2)



第24図 遺構外出土遺物実測図

番号	器種	計測値			材質	特徴			出土位置	備考
		長さ(a)	幅(b)	厚さ(c)		重量(d)				
50	大珠	8.7	3.2	1.9	107.6	ヒスイ	全体的によく研磨され、色調は黄褐色で、淡い緑が一部に見られる。		K 6 d5区	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
51	土師器	壺	[11.0]	3.4	—	長石・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部両面横ナデ。底部外縁ヘラ削り。	J 4 f3区	20%
52	土師器	壺	[10.0]	1.7	[7.0]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部両面横ナデ。	J 5 j4区	25%
53	須恵器	高台付壺	—	(2.0)	6.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り。高台貼り付け後、ナデ。	K 5 d6区	10%
54	須恵器	高台付壺	—	(2.0)	[9.0]	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	底部回転ヘラ切り。高台貼り付け後、ナデ。	K 6 a1区	10%

表1 碓石建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	桁×梁	規格 [m]		面積(m ²)	構造	掘込地業 [m]			備考	
				規模	桁行柱間			形態	長径	短径		
1	G 4 e9	N-6°-W	—	23.5×11.2	—	—	純柱構造	掘込地業	—	—	地業面に2列の小ピット	
2	G 5 j7	N-7°-W	3×3	5.9×4.5	2.3~2.4	1.5~1.6	26.6	純柱構造	坪地業	88~106	80~88	地業内に白色粘土
3	H 5 d7	N-8°-W	3×3	4.9×6.5	1.9~2.3	1.6~1.7	31.9	純柱構造	坪地業	84~124	80~82	地業内に白色粘土
4	H 5 h7	N-7°-W	—	7.9×6.9	—	—	54.5	純柱構造	掘込地業	—	—	
5	H 5 d1	N-7°-W	[3×3]	5.6×(3.3)	1.9	1.7~1.8	(18.5)	純柱構造	坪地業	79~110	70~95	地業内に白色粘土
6	H 5 g1	N-7°-W	—	7×(2.3)	—	—	(16.1)	純柱構造	掘込地業	—	—	
7	H 5 i1	—	—	(6.6×2)	—	—	(13.2)	純柱構造	坪地業	88~106	80~88	地業内に白色粘土
8	I 6 j6	N-81°-W	—	6.5×(7.7)	—	—	(50.1)	純柱構造	掘込地業	—	—	
9	C 3 h0	N-0°-W	—	7.5×(3.3)	—	—	(24.8)	純柱構造	掘込地業	—	—	

表2 捜立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	規格				構造	柱穴 [m]			備考	
			桁×梁	規模 (m)	桁行柱間	梁行柱間(m)		面積(m ²)	平面形	長径	短径	
1	I 4 d6	N-86°-W	(3×2)	(7.5×3.6)	2.4前後	1.8前後	(27.0)	純柱構造	長方形	88~139	85~116	
2	I 4 c0	N-86°-W	(4×2)	(9.6×3.1)	2.4前後	3.0前後	(29.8)	純柱構造	不定形	110~134	79~97	
3	I 5 f4	N-86°-E	(1)×3	7.0×5.7	—	2.1前後	33.9	純柱構造 分	長方形	(110~140)	(82~98)	

第4節　まとめ

金川段・西岸B遺跡は、1959年に中学校校庭の拡張工事の時に総柱掘立柱建物跡が確認され、古代河内都街の一部と考えられてきた。周辺部からは炭化木が出上し、倉庫群の存在も想定されて古代河内都の中核と想定されてきたが、その性格や範囲については未確定であった。

今回の確認調査では、区画溝とその内部に掘立柱建物跡や礎石建物跡で構成される倉庫群が検出されたことで、河内都筋正倉域の存在が明らかとなった。調査区域が限定されていたため、区画溝の一部は未調査ではあるが、第1分溝により南北245m、東西112m以上の区画が確認され、その南部に第2号溝による約68mの別々の区画を有することが確認できた。さらにその南部からも別区画と思われる溝も確認された。内部の施設については、区画溝の中軸線を挟んで、南北に並ぶ2列の礎石建物7棟による倉庫群と、時期の異なる3棟の掘立柱建物跡が検出されている。特に注目されるのは第1号礎石建物跡で、その規模から「法倉」に相当する建物である。確認調査で検出された建物跡の時期については、掘立柱建物跡から礎石建物への変遷と、礎石建物の掘込地業の違いなどから、3期の時期差が考えられる。これらは今後の調査によって確認していくと考えられるが、河内都の設置の時期などについても遺構や遺物面からのアプローチが可能となり、その成果は大きい。そのほか西岸B遺跡では、埋甕のほか、表土中及び確認面から多量の縄文土器が出土し、縄文時代中期の集落跡と複合していることが確認された。

確認調査に並行して河内都政府推定地区において地中レーダーによる探査を行ったところ、正倉院区画溝の北辺から北に300mの地点から北東方向に長さ170mの溝を確認した。四至の確認はできなかったものの、政府域確認の手がかりとなるものとの思われる。平成13年度に実施される政府域及び九重東岡廃寺跡の確認調査で、この溝の四至の確認、正倉院南部の区画の性格や範囲が解明されることが、河内都筋の全容解明につながるものと期待される。

写 真 図 版



第1号溝出入り口部
確認状況



第1・7号溝確認状況



第2号溝南辺確認状況



第1号礎石建物跡
確認状況



第1号礎石建物跡
版築土層断面



第3号礎石建物跡確認状況

第1号据立柱建物跡
確認状況



第3号据立柱建物跡
確認状況



第1号埋甕遺物出土状況



茨城県教育財団文化財調査報告第195集

金田西・西坪日遺跡

平成14（2002）年3月20日 印刷

平成14（2002）年3月25日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター・分館内
TEL 029-225-6587

印刷 (有)山田社印業所
〒310-0912 水戸市見川2丁目63-14
TEL 029-221 3480



付図 金田西・西坪B遺跡遺構全体図